川崎市長賞

伝とうの梶ヶ谷ししまい

梶ヶ谷小学校　５年生　川島　玲南

　私は一昨年、四年生から小学校で昔から伝わるししまいを受けつぎました。私の通っている小学校では、毎年四年生から三年生へと受けつがれており、長い間大切に守られてきた伝とうです。このししまいには約百九十年もの歴史があり、昔伝せん病から町を守り抜いたという言い伝えがあります。地域の人たちの願いや思いがこめられた大切な伝とうを自分たちが受けつぐことができ、とてもうれしいなと思いました。私は今回、伝とうの「ししまい」を受けつぐ活動をしてたくさんの事を学びました。最初は昔から続いているおどりを自分たちが本当にできるか不安もありました。しかし練習を重ね、仲間と協力して取り組んで、伝とうを受けつぐことの大切さや楽しさをだんだん感じてきました。この経験を通して良かったなと思ったことを三つ紹介します。

　まず一つ目は、ししまいの良さや伝とうの大切さをみんなに伝えることができたという事です。私は最初、ししまいについて、

「昔からあるおどりで少しこわい。」

というイメージがありました。しかし、練習をして一つ一つの動きに意味があることや、地域の人たちが長い間大切に守ってきたという事が分かりました。ししまいのおどりには迫力があり見る人を楽しませたり、元気にしたりする力があります。おひろ目会で、ひろうした時には見ている人たちがいつのまにか笑顔になっていたり、

「すごい」

「かっこいい」

と言ってくれた人たちもいて、自分たちが取り組むことで、伝とうの良さを次の世代にも伝えられたかなと思いました。

　二つ目は、みんなで練習してきた成果が一つの舞として完成した時に、大きな達成感を感じられたことです。私は「しし」の役をたん当したくてオーディションを受けました。家では水の入ったペットボトルをししに見立てて何度も動きを練習しました。うでが痛くなり、

「無理かもしれない」

と思ったこともありましたが、無事にしし役になることができ、とてもうれしかったです。練習では、動きを覚えることがむずかしかったり、友達とタイミングが合わなかったりして、うまくいかないこともありました。最初はバラバラだった動きも何度も練習を重ねるうちに、少しずつそろうようになりました。

ペアの子と声をかけ合いながらも、
「もっとこうした方がいい」
「ここを合わせよう」
と工ふうしたことで、息を合わせることができました。また、和太こ・大太こ・竹太こ・笛・すずの演そうとししまいの動きが合わさり、とてもすてきな仕上がりになったかなと思いました。本番ではきんちょうもしたけれど、音に合わせてみんなの動きがぴったりと合ったしゅん間とても気持ちがよかったです。一人ではできないことも、仲間と協力することで大きなものになるのだと感じました。そして、みんなで一つの目標に向かってがんばった時間は、大切な思い出です。

三つ目はふだんなかなかできないことを経験できて、次の学年へしっかり引きつぐことができたということです。今まで私は、伝とうは「だれかがやってくれるもの」だと思っていました。でも実際に自分たちが取り組んでみると、その伝とうは、一人一人の努力や思いによって続いていることが分かりました。おどりを覚えるだけではなく、道具を大切にあつかったり、大切に後はいに伝とうを受けついでもらうためにやさしくどうしたら分かりやすく伝えられるか考えて話したりしました。また先ぱいたちから教わったように今度は自分たちが後はいへ伝えていく立場になって自分の成長も感じたような気がしました。

今回の経験を通して、伝とうを受けつぐ事はかん単なことではないけれど、とても意味のあることだと感じました。そして、仲間と協力することの大切さや、みんなで一つのものを作り上げる楽しさも学ぶことができました。これからも地域の伝とうや文化を大切にし、自分たちが受けついだものを次の世代へつないでいきたいです。そして梶ヶ谷を守り続けてほしいです。